

立原道造と浅間山麓芸術家コロニー

信濃追分を訪れ自然風土に魅せられ、この地をこよなく愛している人は、
今も昔も数多い。訪問者にとって、ここは夏を快適に過ごす別天地である。
そうした中のひとりに、立原道造がいた。
24年の短い人生で、20歳からの約5年間に夏だけでなく何度もこの地を訪れた彼は、
人や自然に出会い、詩をつくり、絵を描いた。創作エネルギーを得て、
たくさんの夢をみ、多くの上質な文学作品や建築作品を残した。
果たせなかった彼の夢が、今も信濃追分の磁場を構成するひとつの力になっている。

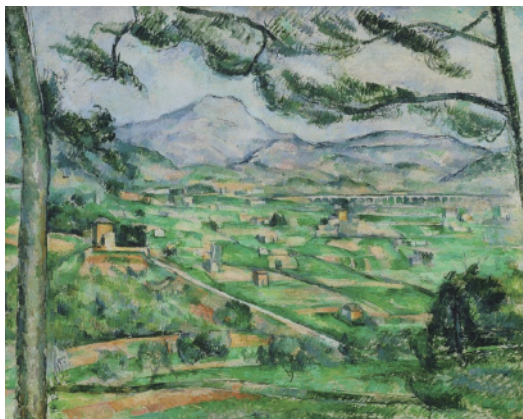
立原道造がみた夢の続き

追分の芸術家コロニー

種田元晴

1934年の夏、建築学徒になりたての詩人・立原道造（1914-1939）が、はじめて追分を訪れた。東京の天気はいまほど酷ではなかったが、それでも、身体の弱い立原にはいくぶんしんどい暑さだった。

追分でやさしい冷気とたわむれている



立原に手を差し伸べたポール・セザンヌ「サントリウヴィラ」
（ライリップス・コレクション）

と、東京が煉獄のように思われてくる。高く遠い別天地にまでこだまする都会のけたたましさは、なんとも哀れで罪深い。ついさきほどまで、自らもあやうくそちらで焼き払われそうだったのかと思うと、そこに苦しむものたちへの祈りをささげずにはいられない。所詮自らも一時しのぎの神隠し、やがて日の短くなる頃には、ふたたび不浄のるつぼへ引き戻されるさためである。そのように思ったか否か、立原は、追分で東京を気にかけて、しかし安らかに過ごしたのだった。

あくる1935年、大学で小学校の設計を課された立原は、今度は東京で追分を思い、敷地を追分に選ぶ。そのスケッチには、東京では決して手に入らないおおきな自然に抱かれて、淡い学舎が隅でちいさく微笑んでいた。

立原は繰り返し繰り返し、山を描いた。セザンヌのように。都会にすり減らされた感受性は、第二の故郷と見定めた浅間山を

描くことで、どうにか塗り直されるにとどまっていた。この救いに気づかせてくれたのは、愛読した文芸誌『白樺』のなかのセザンヌであった。『白樺』に載ったポール・セザンヌ（1839-1906）の「サントリウヴィラクトワール山」の絵は、その山の部分を切り取ると、浅間山を描いたあの小学校のスケッチによく似ている。パリの都会に疲弊したセザンヌは、自らの故郷へかえって、繰り返し繰り返し、山を描いた。遠い画聖におなじ苦悩のあったことを知った立原は、おなじ所作を通じてそれを癒そうとしたのかもしれない。

小学校のスケッチの紙いっぱいに描かれた浅間山は、信濃追分駅のすこし南の、高い丘の木々のあいだから望まれたような見えかたをしている。ちょうどこのあたりには、立原の友人であった建築家・大江宏（1913-1986）の山荘がある。その大江は晩年に、「あれ（筆者注：立原の卒業設計）は、だいたい追分のぼくのところの土地

を仮想の敷地にしているんだけどよね。」と衝撃の発言を残したのだった。

建築学科では、卒業論文のあとに卒業設計を課されることがある。そのテーマや規模や用途は自由に設定できる。いわば、施主の意向に左右されることなく、自らの建築観を余さず表現できる絶好の機会である。

立原が卒業設計に取り組んだのは、はじめての追分から3年後のことだった。その間、彼は毎年追分に通っていた。東京から追分を想い続けた立原は、「浅間山麓に位置する芸術家コロニーの建築群」を卒業設計のテーマとした。追分一帯に、文芸家、音



追分宿。右の建物は大江宏が滞在した亀田屋



2018年5月に冠雪した浅間山



おおきな自然とちいさな建築（立原道造「無題 [浅間山麓の小学校]」鳥瞰図, 1935）（資料提供：立原道造記念会）

楽家、美術家が創作と発表をしながらくらす、壮大な芸術家村の構想であった。

村に計画された図書館、音楽堂、美術館は、いずれもモダンで重厚で洗練された構えをもつ。浅間山を背に映える白く四角い箱が、不穏な都会へむかつて純粹無垢な輝かしさを放っている。それとは対照的に、芸術家の住まいは牧歌的な小屋とされた。

小屋を描いたスケッチには、画面を左右に分かつように中央に木が立っている。その木にすこしかかって右に小屋、左側は草木で埋め尽くされている。建築が自然と同化しつつ、しかし一本の木によって分かれていた。さあ、あなたは人工と自然、どちらを選びますか、など二択を迫っているかのようでもある。

小屋は一定の単位でまとめられ、その周囲には木々が植えられた。ちいさな集落が自然のなかに点在し、追分のいたるところで、さまざまな芸術家が思い思いの活動をこころゆくまで展開する、そのような構想だった。

芸術家が創作に専念できるよう、食事は集落の中央に建つロッジでふるまわれる。夜になれば、近くに住まう芸術家たちがこのロッジにつどい、熱く論議をたたかわせたことだろう。立原自身も、芸術家として、この小屋のいずれかに住まい、ロッジで甘いしるこをほろばりながら、分野を超えた

芸術家らとの交流を楽しむつもりであっただろう。ちいさな小屋へのあこがれは、やがて、より東京に近い浦和のヒアシンスハウス構想へとふくらんでゆく。ヒアシンスハウスの原型は、この卒業設計の小屋にあつたといつてよい。

追分に壮大な夢をみた2年後、立原は逝く。そしてその直後、日本は戦争に突入してしまった。立原の夢は、現実とならなかった。

それから四半世紀がたった頃、「あれは、だいたいは追分のぼくのところ」といった大江宏が、自身のその土地に、小屋とロッジをつくった。小屋は自らの保養の場として、ロッジは、親しい建築家や教え子の学生を招いて、夜通しで建築談義を行う場として設けられた。大江は、立原の構想した芸術家コロニーのその一端を、まさしくその地にあらわしたのであつた。

大江のロッジの立ち姿を前にすると、まるで立原の描いたロッジが、立原の理想のままに建っているかのような錯覚に陥る。立原のスケッチと大江の建築を見比べられる。二つのおおきな屋根とその間のちいさな屋根による構成がそっくりではないか。棟全体を持ち上げている細い柱群のつき方、中央のわずかな階段を経ての入り方、寄棟屋根から伸びる角柱の煙突のかたち、バルコニーをめぐる手すりなど、細部にいたるまでよく似ている。果たして偶然の一

浅間山麓に位する 芸術家コロニーの建築群

本計画は浅間山麓に夢みた、ひとつの建築的幻想である。優れた芸術家が集まって、そこに一つのコロニーを作り、この世の凡てのわづらいから高く遠く生活する。

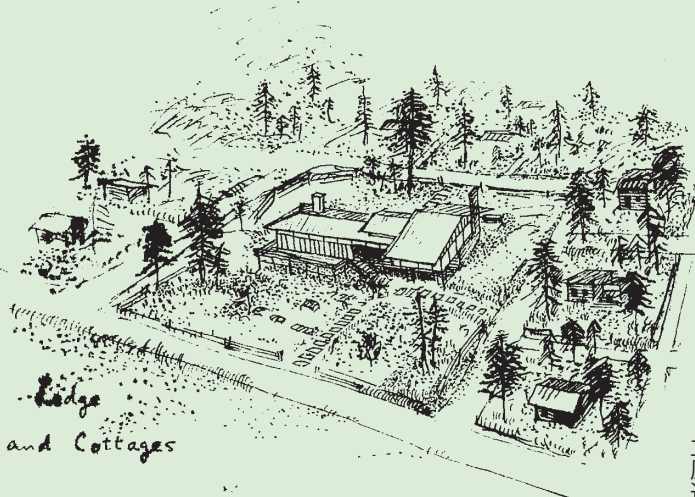
しかしそれは隠者の消極的な遁世の思ひでなく、寧ろ却って低い土地の生活にか、やかしい文化の光をなげかけやうとする積極的な意欲から――。

芸術家の一人としての建築家の立場から私にその計画は幻想され乾燥した火山地方の高原にその夢は結晶した。

——立原道造

卒業設計の主旨

夢の結晶として的小屋群
(立原道造卒業設計スケッチ「Lodge and Cottages」,1937)
(資料提供:立原道造記念会)





夢の具現（別所沼のほとりに建てられた「ヒアシンスハウス」
1938 構想, 2005 有志により建設）



分かたれた自然と建築（立原道造卒業設計「浅間山麓に位置する芸術家コロニーの建築群」の一例「集落内の一小住宅」1937）（資料提供：立原道造記念会）



夢の継承（大江宏「追分の山荘 ロッジ棟」, 1962）

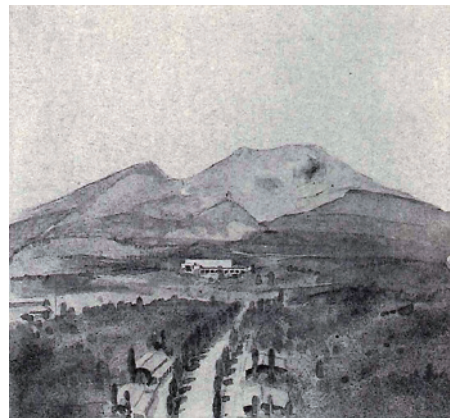


立原の描いたロッジ（P6の「Lodge and Cottages」を「一部拡大」）

致だろうか。
大江は、軽々しく他者への想いを吐露しない。しかし大江は、青春の思い出を問われるたびに、立原の名を口にしていった。そんな大江のつくったロッジには、立原への惜しみない敬愛が満ちあふれているのだった。
立原の夢は、立原にとつては夢で終わった。しかし、彼の夢はついでない。いくえにも重なったわたしたちの夢中夢のなかで、もはや夢かうつつかつかぬほどに、彼の夢がこれからもみつづけられてゆくことだろう。



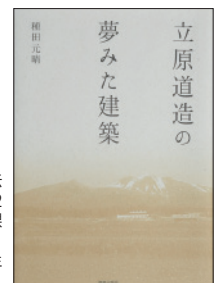
追分宿南側の田園地帯から、浅間山の全景が眺められる



浅間山麓に輝く白い箱（立原道造卒業設計スケッチ, 1937）
（資料提供：立原道造記念会）

種田元晴（たねだもと はる）

1982年東京都生まれ。2005年法政大学工学部建築学科卒業、2012年同大学院工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）、一級建築士。『立原道造の夢みた建築』2016年鹿島出版会刊



夢はいつもかへって行った 山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しづまりかへった午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠ってるた

——そして私は

見て来たものを 島々を 波を 岬を 日光月光を
だれも聞いていないと知りながら 語りつづけた……

夢は そのさきには もうゆかない

なにもかも 忘れ果てようとおもひ

忘れつくしたことさへ 忘れてしまったときには

夢は真冬の追憶のうちに凍るであらう

そして それは戸をあけて 寂寥のなかに
星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう

(立原道造「のちのおもひに」)

立原道造を知る人々

日本橋、本郷、谷中、そして信濃追分

森まゆみ

地域雑誌「谷中・根津・千駄木」をやっていた26年間、いちばん多い問い合わせは詩人、立原道造のお墓のある寺を聞くものだった。それは台東区谷中三崎坂上の多宝院という寺にある。なんとファンが多いのだろう、と私は驚いた。

私の伯母近藤富枝が立原道造に憧れて追分に別荘を作ったのは私が大学生の頃だ。今思うと、日本橋の袋物商に生まれた伯母は、荷造り用の木箱製造立原屋に生まれた彼に親近感も抱いたに違いなかった。その頃魚市場（河岸）が日本橋にあり、立原の家業は魚を入れるトロ箱製造業ではなかったかと思う。立原の通った久松小学校は私の親戚たちも卒業している。



若い頃の私は西脇順三郎の硬質なきらめきの方に惹かれていたが、「はるかな」「すかな」「ほのかな」「やはらかな」「しづかに」「ちひさな」「すきとほつた」「きよらかな」と語彙の少ない立原の甘さにも、若くて純粹なままに死ぬことにも、惹かれる気持ちがあった。

それからずいぶんの月日がたつて、立原をこよなく大切に思う人、実際に立原を知る人に何人もあった。

例えば本郷のペリカン書房の品川力さん。著名な古書店主だ、無教会派のクリスチャンで、内村鑑三全集の校訂を担当した方だ。戦前はレストラ「ペリカン」を経営していた。立原が「大きな目玉のはにかみ屋がいかにすまないといった顔で、テーブルの隅から『ポオドレール』をお願いします」と頭を下げた」といった。ポオドレールの詩「旅への誘い」にデパルクが曲をつけ、シャルル・パンゼラの絶唱で知られたレコードを聴くためにしばしばやって来たのであった。

品川さんの友人の三輪福松さんが見舞いに行つて「何か欲しいものがあつたら」といったら、立原は「五月の風をゼリーにし

て持つてきてくれ」と言ったそうだった。（品川力「本豪落第横丁」）

もう一人は渥美半島まで対談のため会いに行つた杉浦明平さんである。一高短歌会以来の友人だ。その時の対談テープは残念なことに版元が無くしてしまつたらしい。記憶では、一田舎から出て僕は菊坂の下宿にいた。すると立原が枕元で「起きろイワ、山師トマのお出でだよ」などといい、一緒によく本郷や根津の本屋などを歩いたものでした。体育が苦手という以外何の共通点もなかった。こっちは豚カツが食べたのにな、立原は甘い物好き。あれには参つた」ということだった。

杉浦さんは郷里に帰つて町議を務め、かたわら「渡辺華山」など優れた伝記を書いた。そのおうちは庶民的で、帰りに名物の知多半島のメロンをお土産にくださつたのを覚えている。他にも堀辰雄夫人、堀多恵子さん、生田勉さん、猪野謙二さん、上野奏楽堂保存の時にご一緒した海老原一郎さんなどを思い出す。海老原さんは立原と同じ石本建築事務所勤めていた。そんなこんなで私の中にも立原の像が、結ばれてきた。



昭和12年11月の油屋の火災の時に、逃げ遅れそうになつた立原はどんなに怖かつたことだろう。それから一年4カ月ののち、

立原は24歳でその生を終える。今の油屋の建物は火事の後、道の反対側に再建されたもので、私はその林の中の建物にたまに泊まる。

「僕はさびしい所で、くらしているよ。貴中山道と北国街道の別れ道だつた追分という宿場なのだ・・・」（生田勉あて、昭和9年8月11日付）

そう書いた立原の長い影が、しづかな宿場の暑い路上にゆらゆらと見えるような気がする。

（もりまゆみ）

1954年東京生まれ。作家。友人と地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊。2009年の終刊まで編集人を務めた。歴史的建造物の保存活動にも取り組み、日本建築学会文化賞、サントリー地域文化賞を受賞。著書は『鵜外の坂』『即興詩人のイタリア』『千駄木の漱石』『暗い時代の人々』『子規の音』他多数。

小さな小屋

Art Project 沙庭ディレクター・ナカムラジン

2016年、油やにご縁のある作家さんたちに協力を仰ぎ「第1回追分ビエンナーレ」というアートイベントを開催しました。ギャラリーのような箱モノの空間を飛び出して油やの敷地全体や、軽井沢追分界隈を包む独特な磁場の中でアート表現ができたらと考えたわけです。

参加いただいた作家の皆さんとともにまさに手探り、手弁当でやってみた第1回目。そして2年後の2018年、その貴重な縁談を踏まえて、現在全国的な地域起こし型ビエンナーレ形式のアートイベントの乱立傾向の中で、より追分らしい第2回目をどのように迎えるかと考えるようになりまして、追分オリジナルの思索の始まりです。

そうした経緯を経て今回あらためて着目したのが、詩人であり建築家の立原道造の卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群」です。立原道造が師の室生犀星や堀辰雄を通して知った浅間山麓信濃追分の風景に寄り添い考案されたもの。若き昭和の詩人が自然豊かな山岳・田園の磁場力を背景に構想した芸術家（美術・文学・音楽など）村から発信されたであろう理念

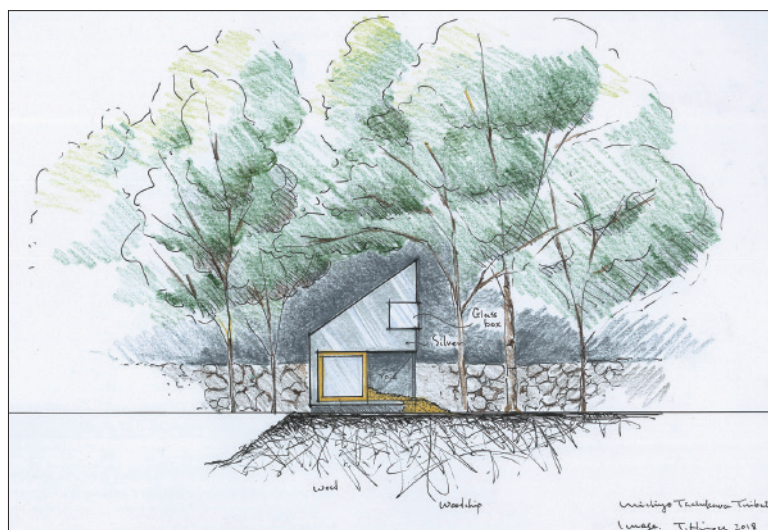
を、時空を超えたままにその地で現代の作家たちが再解釈し、今の文化芸術を創造発信していけないだろうか考えました。

具体的には、立原道造の残したスケッチ「Lodge & Cottages」にある建築群（コロニー）の核を旧脇本陣、元旅館の「油や」と捉え、その周辺に小規模な衛星建築を数年計画で配置していく計画です。

立原道造は「建築群」のエスキースとは別に「ピアシンスハウス」という小屋のスケッチも残しています。そのイメージがこの小規模建築Ⅱ「小さな小屋の衛星」というわけです。おそらく人ひとりが居住可能なギリギリの空間。一棟ごとに建築・デザインに個性を持たせ、一定の機能は保ちながらもよりアーティスティックな造形性の高さも目指したいところです。

「油や」の敷地内には、昭和40年代頃夏場勉強のために滞在し、多くの学生が利用した小さなバンガローが存在したそうです。平成の最終年代に立ち上がろうとする新バンガローの中で現代人は何を思い何を創造していくのでしょうか。もちろん独り籠って何も生み出さない時間を過ごす

…というのかもしれませんが。いずれにしても立原道造の構想より80年後、その場所で「浅間山麓に位する芸術家コロニーの建築群」の実現に一步でも近づいたら幸いです。



設計デザイン◎広瀬毅 建築設計室
Takeshi Hirose Architect & Associates
<http://hirose-aa.com/>



「小さな小屋」を展示公開（無料）

（時期）H30年9月～10月

（場所）信濃追分文化磁場油や（旧油屋旅館）裏庭

遊学座

種田元晴氏の公開トークイベント（無料）

「立原道造の“芸術家コロニー”を語る」（仮）

（時期）H30年10月27日（土曜日）14時から

（場所）信濃追分文化磁場油や・ギャラリー・一進